



Title	幼児の向社会的行動に関する比較発達心理学的研究
Author(s)	清水, 真由子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/60007">https://hdl.handle.net/11094/60007</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	し 清 水 真由子
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 26071 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	幼児の向社会的行動に関する比較発達心理学的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 日野林俊彦 (副査) 教授 釤原 直樹 講 師 山田 一徳 教授 金澤 忠博

### 論文内容の要旨

#### 第1章 序論

私たちは他者を援助し、物を分け与え、悲しんでいる人がいれば慰め、何か目標を達成するために協力し合う。このような向社会的行動はごく身近な人に対してだけではなく、それほど親しくない人に対してもみられる。互いに助け合う社会を大規模な集団で形成するのは、他の動物種と比べて人の社会の大きな特徴である (Fehr & Fischbacher, 2003)。

第1章では「なぜ人はこれほどまでに向社会的に振舞えるのか」という問題提起に対して、系統発生、究極メカニズム、至近メカニズム、個体発生という4つの視点から先行研究を概説した。そして互いに助け合う社会を大規模な集団で形成するためには、困っている人がいればいつでも助けるのではなく、社会的評価に基づく相手に応じた選択的な向社会的傾向が重要であることを論じた。本研究では上記の4つの視点を踏まえつつ、幼児期に向社会的行動がどのように発達するかに着目して研究を行った。第2章、第3章、第4章で示された4つの研究を通して、幼児同士の自然なやり取りが観察できる集団保育場面において、向社会的行動を示し始める2歳齢と、同年齢の幼児同士のやり取りが熟達する5・6歳齢を対象として選択的な向社会的傾向を検討した。

#### 第2章 2歳齢保育園児の向社会的行動にみられる選択性

第2章では2つの研究を実施し、2歳齢児の向社会的行動にみられる選択性に影響する要因として、相手の特徴や相手との関係性(第2節)そして相手の行動(第3節)を取り上げて検討した。先行研究では、主にどのような幼児が向社会的行動を示しやすいのかといった行い手の特徴が検討され、相手がどういった特徴を持ち、どのような行動を示しているのかといった受け手の特徴が向社会的行動に及ぼす影響はあまり焦点があてられてこなかった。しかし、幼児がどのような他児に対して向社会的行動を示しやすいのかを調べることによって、幼児が他児をどのように評価し、またその評価がどのように幼児の向社会的行動に影響を及ぼしているのかを検討することが可能となる。

第2節の研究では、泣いている他児に対する2歳齢児の反応が、泣いている他児の特徴や泣いている他児との関係性によって変化するのかを検討した。泣いている他児の特徴として普段の「泣きやすさ」「攻撃性」「被攻撃性」「孤立性」、泣いている他児との関係性として「親密性」を取り上げ、幼児の向社会的な反応に影響するのかを調べた。その結果、泣いている他児の普段の泣きやすさ、攻撃性、泣いている他児との親密性によって、幼児の向社会的な反応が変化していた。泣きやすく攻撃性の高い他児が泣いていると幼児は向社会的な反応を示すことが少なく、泣いている他児が親密な相手であれば向社会的な反応を示しやすかった。これらの結果から、2歳齢児はこれまでに受けた親和的な相互交渉や居合わせた泣きの頻度、普段の攻撃性から相手の特徴を識別して

社会的評価を行い、その評価が相手が泣いている状況での向社会的行動に影響を与えている可能性が示唆された。第3章の研究では、物の所有を巡るやり取りの内容を詳細に検討し、やり取りの両者の間で生起する分与行動に着目して、相手の行動に応じて向社会的行動が変化するのかを検討した。その結果、取り合っている対象物を先に所有していた幼児は最終的に対象物を獲得しやすい傾向がみられたが、やり取りの相手が対象物を強引に取ろうとする行動ではなく、泣きや交渉といった方法で要求する行動を示した場合、対象物を先に所有していた幼児は対象物をやり取りの相手に分与しやすかった。これらの結果から、2歳児は対象物を先に所有していたとしてもやり取りの相手の泣きや交渉といった行動によって向社会的行動を調整している可能性が示唆された。

第2章の2つの研究を通して、向社会的行動を示し始める2歳児においてすでに、相手の特徴や相手がやり取りの間にどのような行動をしたのかに応じて選択的に向社会的行動を示すことが明らかとなった。発達初期から、幼児は同年齢の他児とのやり取りの中で選択的な向社会的傾向を示しており、他者と広く協力関係を築くために必要な社会的評価能力を発揮している可能性が示唆された。

### 第3章 幼児間の相互交渉における直接互恵性

血縁関係にある個体との協力関係は多くの動物種で確認されているが、人は血縁関係にある個体とだけでなく血縁関係にない個体とも協力関係を形成する。このような協力関係を可能にすると考えられているメカニズムの1つが、以前自分を援助してくれた相手を選択して援助するという直接互恵性である (Axelrod & Hamilton, 1981; Trivers, 1971)。発達心理学分野においても、幼児間でみられる直接互恵的なやり取りは幼児の社会性の発達や認知発達の理解にとって重要であるとみなされ、これまで研究がなされてきた。しかし、幼児期の直接互恵性に関する先行研究は、主に実験場面におけるやり取りを検討しており、幼児同士の自然なやり取りの中で短期的に直接互恵性が成立しているのかを検討した研究はない。そこで第3章の研究では、5・6歳児保育園児が同年齢の他児との集団保育場面の中で、相手から向社会的行動を受けたら向社会的行動を返しているのかを検討した。その結果、幼児は統制場面と比較して相手から向社会的行動を受けた直後の場面において、その相手に向社會的行動を示しやすかった。相手から向社会的行動を受けた後、その相手に向社會的行動を返すまでの時間の分布を相手から向社会的行動を受けた後の場面と統制場面で比較すると、7分目までの分布に違いがみられた。5・6歳児は、7分間という短時間の間に直接互恵性を成立させやすいことが明らかとなった。この結果は、同年齢の他児との集団保育場面の中で、短期的な直接互恵性が成立していることを示した初めての知見である。また、統制場面と比較して相手から向社会的行動を受けた直後の場面において、幼児はやり取りの相手に親和的行動も示しやすかったことから、やり取りの相手から向社会的行動を受けたら、その相手にポジティブな感情を抱き、その心理的な変化が短期的な直接互恵性を調整している可能性が示唆された。

### 第4章 幼児間の相互交渉における間接互恵性

血縁関係のない相手と広く協力関係を築く傾向は、他の動物種と比較して人の社会の大きな特徴である (Fehr & Fischbacher, 2003)。なぜ人がこのような協力関係を築くことができるのかを説明するためには、自分が誰かを助ければ、その行為を見ていた別の誰かが自分を助けてくれるという間接互恵性のメカニズムが必要不可欠である (Nowak & Sigmund, 2005)。間接互恵性が成立するためには、相手の第三者に対する行動について社会的評価をし、その評価に基づいて向社会的行動を変化させる必要がある。いくつかの研究によって、幼児は間接互恵性を形成するために重要な社会的評価能力を持ち、その評価に基づいて向社会的行動を変化させることができている。しかし、これらの知見はペベットや大人の実験者とのやり取り内に限定されたものであり、他児とのやり取り内に一般化することはできない。そこで第3章の研究は、5・6歳児保育園児が同年齢の他児との集団保育場面の中で、間接互恵的な行動傾向を示すのかを検討した。その結果、幼児は、統制場面と比較して相手が第三者に向社會的行動を示した後の場面において、その相手に向社會的行動や親和的行動を示しやすかった。つまり、5・6歳児は、他児の第三者への向社会的行動に応じて、向社会的行動や親和的行動を変化させるという、間接互恵的な行動傾向を示すことが明らかとなった。この結果は、同年齢の他児とのやり取りの中でも、間接互恵性が成立していることを示した初めての知見である。5・6歳児は相手の第三者への行動に基づいて社会的評価を行っており、その評価が向社会的行動に影響していた可能性が示唆された。

### 第5章 総合論議と今後の展望

本論文では、幼児は2歳から他児が泣いていたら慰めたり、物を分与したりして向社会的に振舞えることを示した。のことから、幼児期初期から幼児は他児の苦痛の表出に対して、自発的に向社会的行動を示すことが明

らかにされた。また、幼児の向社会的行動は相手の特徴や行動、また相手の以前の自分に対する行動や第三者に対する行動に応じて選択的に示されていることが実証された。互いに助け合う社会を大規模な集団で形成するためには、他者から搾取されるのを防ぎ、特定の他者にのみ選択的に向社会的行動を示すことが重要である。発達初期の向社会的行動は相手を選ばず無差別に示されることが指摘されているが (Hay & Cook, 2007; Warneken & Tomasello, 2009)、本研究では幼児期の向社会的行動は相手に応じて選択的に示されていると考えられた。本研究の知見から、人の互いに助け合う社会にとって必要不可欠な選択的な向社会的傾向が、幼児期を通して徐々に発達していく可能性が示唆された。

今後、選択的な向社会的傾向の発達の起源を調べるために、研究手法を工夫して、より低年齢の幼児における向社会的傾向を検討する必要がある。また、選択的な向社会的傾向の背後で働く能力はどのように発達するのかについても検討していきたい。

### 論文審査の結果の要旨

私たちは他者を援助し、物を分け与え、悲しんでいる人がいれば慰め、何か目標を達成するために協力するという、いわゆる向社会的行動(prosocial behavior)を取ることができる。近年、乳幼児期における向社会的行動の発達研究は、人間の社会性や社会的発達の研究において重要な役割をはたしている。

本論文は、先行研究が大人であったり実験場面であったりするのに対して、保育園の自由遊び場面における幼児の行動を詳細に分析し、向社会的行動の発達の一侧面を明らかにすること目的としてなされたものである。申請者は、2歳児および5・6歳児を観察対象として長期にわたり行動をビデオ撮影し、その映像データを種々の行動観察法により数量化して分析するという労力のかかる研究を遂行した。

本論文では、4つの研究を実施して以下の結果を得た。

(1) 向社会的行動を示し始める2歳児においてすでに、他児が泣いていたら慰めたり、物を分与したりして向社会的に振舞えることを示した。さらには、泣きやすく攻撃性の高い観察対象児が泣いていると幼児は向社会的な反応を示すことが少なく、泣いている観察対象児が親密な相手であれば向社会的な反応を示しやすい傾向も見られた。相手の特徴や、相手がやり取りの間にどのような行動をしたのかに応じて、選択的に向社会的行動を示す可能性が示された。

(2) 自分を援助してくれた相手を選択して援助するという直接互恵性の研究では、5・6歳児は相手が向社会的行動を示すと7分間という短時間の間に向社会的行動を返しやすいことが明らかとなった。さらには、自分が誰かを助ければ、その行為を見ていた別の誰かが自分を助けてくれるという、間接互恵性の一侧面である社会的間接互恵性に注目した研究では、5・6歳児は、他児の第三者への向社会的行動に応じて、向社会的行動や親和的行動を変化させるという、間接互恵的な行動傾向を示すことが明らかとなつた。

これらより、幼児期においてすでに、向社会的行動は相手の特徴や行動、また相手の以前の自分に対する行動や第三者に対する行動に応じて選択的に示されていると考えられた。本研究の知見から、互いに助け合う社会にとって重要な役割を果たすと考えられる選択的な向社会的行動が、幼児期早期より発達している可能性が示唆された。

申請者は、本論文において保育園という実際の生活場面で、動物行動学に由来する厳密な実験的観察場面を設定し、統制場面との比較から幼児の向社会的行動を詳細・精緻に分析し、幼児の社会性の発達に生態学的妥当性の高い知見をもたらした。

発達心理学的研究としての独自性・将来性も高く、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと認定した。